

## 武器としての日本語思考

—大恐慌を駆け抜けた男、高橋是清に学ぼう—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：「武器としての日本語思考」とは、どのようなことですか。

A：（1）元内閣府事務次官で、現在、国家公務員共済組合連合会（KKR）理事長の松元崇（まつもとたかし）氏著、新潮新書、新潮社、2026年2月20日刊の書名です。

（2）松元氏は、日本語の特徴として、「主語がない、すぐに結論を出さない。空気を読む。その特徴こそ、強みになる」「日本語の思考で世界で戦うためには、まず日本語の特徴をよく理解することが第一」。そのうえで、「英語の議論と日本語の議論を使い分けて対応していかなければならない」。

（3）松元氏は、「まずは、日本語を知り、次に英語や中国語を知り、その違いを知ることです」「敵を知り、己を知れば、百戦して殆（あや）うからず」ということであると述べておられます。

Q：日本語の議論の特徴は何ですか。

A：（1）松元氏は「相手との心理的な距離をうまくコントロールして、相手と感情を共有する構造をつくり上げながら議論を集約させるところにあります」と述べておられます。

（2）更に、松元氏は、「様々な利害が錯綜し、状況が日々変転する現代の国際社会や国内政治で、『論より証拠』の（英語型の）議論が暴走しないようにし、それぞれの関係を創り上げていくために、日本語の議論（日本語思考）が役に立つはずですよ」とも述べておられます。

（3）以前、「関係は本質に先立つか」という、異文化教育方法論の第一人者、渡辺文夫・上智大教授が提唱なさっている「エポケー（思考停止）」の議論を、この連載でもご紹介したことがあります。「エポケー」とは、多様な集団で交流する場合に、まずは、自分の思考を停止し、相手の発言をそのまま繰り返し、「あなたは、～について～とお考えなのですね」と「付加疑問文」で確認。相手の言っていることを、自分の考えを入れずに、そのまま認識、これをしばらく続け、その理解に励むことです。

（4）相手の尊厳を大切にする第一は、一つのテーマについて、まずは、相手の意見や考え、立場を、自分のことはさておき、率直に聞くこと。「本質的な議論をする前に、まずは、よい関係をつくる。よい関係をつくる時に一番役立つのが、相手の発言をそのまま理解し、「あなたは、～について、～とお考えなのですね」と「付加疑問文」で確認。そのあと自分の意見を述べ、相手を尊重しながら、意見交換をする。

（5）関係性を重視する松元氏のお考えと、「関係は本質に先立つ」という「エポケー（思考停止）」の考えは、根っこのところで相通じるものがあると考えます。

**Q：副題の「大恐慌を駆け抜けた男、高橋是清に学ぼう」とは、どういうことですか。**

A：(1) これも、松元崇氏のご著書の題名（中央公論新社、2009年1月10日刊）です。著者である松元氏は、東京大学法学部に在籍中、司法試験と国家公務員上級試験に同時合格。大蔵省（現財務省）に入省、主計局次長時代に、本書を執筆、2012年内閣府事務次官にご就任。本書の元になったのは、財務省の機関誌「ファイナンス」の連載。多くの国家公務員や地方公務員、金融マン、エコノミストや企業人が、かたずを飲みながら、この連載を心待ちにしていたと伝え聞きます。

(2) 「命がけて軍部と闘い、財政規律を護ろうとした男、高橋是清の生涯をたどってみると、どんな困難に遭遇しようとも、決して希望を失うことなく、臨機応変に事態に対処していく姿に勇気づけられるものがある」。

(3) 「かつての世界大恐慌に匹敵する国際的な金融危機が叫ばれ、国内的には社会保障制度や財政に対する国民の信頼が揺らいでいる今日、高橋是清とその時代を振り返り、思いを新たにするのは、この国の子どもたちに、少しでもよい国を遺すために、微力を尽くしていくことの大切さである」。

○財政規律を重視する国家運営を目指し、立派です。

**Q：学習塾、予備校、私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。**

A：(1) 小学生、中学生、高校生に、熱心に指導し、ゆくゆくは、医学部医学科や、東京大学、京都大学・東京科学大学など国立大学、慶應義塾大学・早稲田大学など私立大学の、トップ校・難関校へ合格を果たし、教え子が大きく羽ばたくことを願う先生方は、是非、松元氏の二冊のご著書をお読みいただきたく、希望します。生徒にも、是非、おすすめください。

(2) 「学力」とは、「自分から進んで学ぶ力」「主体的に学ぶ力」と考えます。また、「学力」とは、「学んだことを自分のことばでいえる（表現・説明できる）力」と考えます。「学力」が身に着くほど、「多様な選択肢のある人生を歩む」ことができます。「正常に機能する社会の形成に貢献」することができます。

(3) 「武器としての日本語思考」を身に着けると同時に、日本以外の国々で英語を学んだ人々と、「自分のことば（英語）で、学んだことをいえる（表現・説明できる）力」を、是非、身に着けさせてください。高橋是清のように、「志の高い」「与えられた使命を全うすることを目指す人材」を、一人でも多く、お育て頂きたく希望します。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：今月も、僭越とは存じますが、先生方にお読みいただければ、お役に立つと思われる本をご紹介させていただきます。

(1) 一冊目は、長谷川三千子著「民主主義とは何なのか」文春新書、文藝春秋、2001年9月20日刊です。これだけ、民主主義とは何かを考えさせるような出来事が、世界中で生起しているのなら、本気で民主主義とは何かを考えることが大事と考えます。長谷川先生のこの一冊は、ていねいに、行きつ戻りつしながら、民主主義を考える絶好の本と確信します。

(2) 二冊目は、スピノザ著「知性改善論」岩波文庫、岩波書店、1931年4月5日刊です。17世紀、オランダを代表する哲学者、スピノザの本書は、自由とは何かを考えるのに参考になりま

す。同著「エチカ（倫理学）上・下」岩波文庫、岩波書店、1951年10月25日刊もご一緒にどうぞ。國分功一郎著「はじめてのスピノザ」講談社現代新書、講談社、2020年11月20日刊をまず読み、スピノザを読み解くのも一手。

(3) 三・四冊目は、イギリスの思想家、ヒューム著「市民の国について（上・下）」岩波文庫、岩波書店、1952年7月5日刊と、アダム・スミス著「道徳感情論（上・下）」岩波文庫、岩波書店、2003年2月14日刊です。アダム・スミスの理解には、ヒュームが欠かせません。

○アダム・スミスの「道徳感情論」やヒュームの作品は、中国の古典、四書（論語・孟子・大学・中庸）」にある「相手を思いやる気持ち」と、相通じるものがあります。

○あまり知られていないようですが、「諸国民の富」で有名な、アダム・スミスには、この「道徳感情論」の他に、「法学講義」（岩波文庫）があります。「法学講義」「道徳感情論」「諸国民の富」の三部作は、アダム・スミスが、「法律」と「道徳」の秩序の中で「経済の自由」を位置付けたものと考えます。

(4) 五冊目は、バジヨット著「イギリス国制論（上・下）」岩波文庫、岩波書店、2023年5月23日刊です。イギリス民主主義の原点、19世紀、イギリスの議会政治を分析。著者は、イギリスの経済週刊誌「The Economist」の編集長も務めました。

○英語の勉強の目標として、どのようなものが読めるようになればよいか。「一推し」は、バジヨットが編集長を務めた、この「The Economist」です。巻頭の「カバーストーリー」（毎週5つの文章×1年52週＝約200の論説）だけでも、1～2年間、辞書と首っ引きで、「意味調べノート（発音記号と意味を書き写す）」をつくりながら、全文、ていねいに読み込むことをおすすめします。意味や発音のわからない語句は、「気持ちが悪い」と考え、辞書を用いて、全部、調べ、全部、覚える。意味・発音調べが終わったら、スラスラよく読めるようになるまで、「音読練習（発音練習）」と「書き取り練習」で、「表現力」と「語彙力」が一気に身に着きます。Economist 誌で「学んだことを自分の英語でいえる（表現・説明できる）」を目指しましょう。どんな難関大学の問題でも、最後まで、試験時間内に、論理的・分析的に読み、正解を導くことができるようになります。大学や大学院で、また、仕事や社会的活動、日常生活、よく生きるために、一生役に立つ英語が身に着きます。

(6) 第六冊目は、佐久間万夫著「人生、価値ある挑戦 ミドルエイジ起業の成功法則」、高木書店、2025年10月27日刊です。起業家精神とは何かがよくわかる好著です。

(7) 第七冊目は、堀内勉著「人生を変える読書 人類三千年の叡智を力に変える人生を変える読書 人類三千年の叡智を力に変える」Gakken 2023年12月19日刊です。同著「ファイナンスの哲学—資本主義の本質的な理解のための10大概念」ダイヤモンド社2016年7月14日刊とともに、是非読みにください。佐久間氏、堀内氏はともに学校への出張授業に出掛けている経済同友会の仲間です。